

# 豊田市民芸館だより



水色地遠山に落雁文様紅型衣裳

琉球王朝時代

19世紀

丈140  
・0 cm

日本民藝館蔵

## 目次

- ・「沖縄の美」展準備レポート…………… 2頁
- ・「全国の郷土人形-祈り・願い・美しさのかたち」展開催報告…… 3頁
- ・「柳宗悦と愛知の民芸」展資料紹介…………… 4頁
- ・「河井寛次郎展-寛次郎の魅力は何ですか」準備レポート…………… 5頁
- ・民芸の森から…………… 6頁
- ・令和4年度事業報告…………… 7頁
- ・民芸館からのお知らせ…………… 8頁

第35号

# 「沖縄の美」展準備レポート

豊田市民芸館は開館40周年記念特別展として「沖縄の美」展（10月7日（土）— 12月3日（日））を開催します。本展は、豊田市民芸館において“沖縄の工芸”を本格的に紹介する初めての展覧会となります。

\*

沖縄は、古来、日本本土や中国、朝鮮、東南アジアの国々との交易を通じて多様な文化芸術を受け入れ、沖縄の精神的、文化的風土と融合させることで、亜熱帯の海に囲まれた美しい島々に、独特の文化を育んできました。染織物、焼物、漆器など、沖縄には琉球の時代から今日に伝わる、独自の伝統工芸品が数多くあり、「工芸の宝庫」とも言われています。

その地を日本民藝館創設者の柳宗悦（1889-1961）が初めて訪問したのは1938年の暮れのことでした。そして1940年の夏までに4回、あわせて100日程度滞在しました。最初の沖縄訪問は柳にとって念願の来沖であり、彼自身も「私は心を躍らせて海を渡りました」と回顧しています。当時の沖縄は、中央から遠く離れた文化的に遅れた地域とみなされていました。しかし実際に訪れた柳の眼に映った沖縄は驚くべき美の宝庫でした。そこで人々の暮らしや手仕事にふれ、古着市で織物を、古道具屋や荒物屋で焼物や漆器を蒐集しました。また、工芸品ばかりではなく、建物や人、暮らしぶりにいたるまで、色濃く伝統が残る島々に魅了された柳は、「沖縄」を調査研究し、その魅力を紹介する意義の大きさを痛感したのです。

そして2度目の旅は、柳が信頼する仕事をしていたつくり手らを伴うもので、沖縄の工人たちと密接な交流を持つことを目的としました。この旅で濱田庄司、河井寛次郎は焼物を、芹沢銈介らは染物を、柳悦孝らは織物を学びました。帰京した柳は展覧会などを通じて精力的に沖縄の紹介を行います。3度目の沖縄行は、日本民藝協会の協会員らとともに写真や映画、観光事業に携わる関係者が同行し、沖縄の観光をプロモートする準備のために組織されたといわれています。この旅に同行した写真家の坂本万七は、美しい沖縄の風景を被写体に膨大な量の貴重な写真を撮影しました。

1940年の最後の訪沖から5年、沖縄は戦場となり壊滅的な被害をこうむりました。柳が実見したその夢のような美の王国は沖縄戦で灰燼に帰ってしまったのです。かつて柳と共に沖縄で学んだ工芸作家たちは戦後柳に代わり度々現地を訪れ彼らを励まし、沖縄の手仕事の復興に力を貸したのです。

\*



朱漆沈金宝袋形酒瓶  
琉球王朝時代 18-19世紀 日本民藝館蔵

今回の展覧会は、令和4年度（2022年）、本土復帰50年の節目に日本民藝館で開催された特別展を豊田市民芸館の空間に合わせて再構成します。型紙を使って文様を染める華やかな紅型の衣裳や手描きで糊引きするうちくい（風呂敷）、芭蕉や芋麻、絹、木綿などを材に地域ごとに特色のある縞や緋の織物、技法も形態も多様な陶器や漆器とともに展示します。また、柳らの訪問時に撮影された戦前の沖縄を紹介する写真もあわせて展覧し、改めて沖縄が「美の宝庫」であることを紹介します。

（都筑正敏）

参考：「創設80周年特別展 日本民藝館所蔵 沖縄の工芸」、「復帰50周年記念 沖縄の美」フライヤー

## 沖縄の美展・記念講演会「柳宗悦と沖縄」

日 時：11月3日（金・祝）午後2時—3時半  
講 師：杉山享司氏（日本民藝館常務理事、元学芸部長）  
会 場：第3民芸館  
聴 講：無料（ただし会期中の観覧券の提示が必要）  
定 員：先着50名（事前申込み不要）

## 同時開催「ちゅらさん沖縄」展（館蔵コレクションより）

会 場：民芸館ギャラリー  
（第3民芸館）  
会 期：9月2日（土）—  
11月26日（日）  
観覧料：無料



# 「全国の郷土人形—祈り・願い・美しさのかたち」展 開催報告

会期：令和5年1月21日—5月7日

約2,000点という膨大な数の郷土人形を紹介した「全国の郷土人形—祈り・願い・美しさのかたち」展。第1民芸館では東北～中部地方、第2民芸館では中部～九州地方でつくられた土人形や張子人形を中心に、産地ごとに展示しました。まずはこれだけ多くの貴重な資料の貸し出しを快く承諾いただいたご所蔵者に深くお礼を申し上げたいと思います。

今回の展覧会には、江戸から昭和初期につくられた、非常に珍しくかつ保存状態が良い伝世品が数多く出品されました。こうした人形の出品は、郷土人形の研究者や愛好家たちのあいだから驚きの声がありました。というのも、郷土人形（とくに土人形や張子人形）は、その素材のもろさゆえ、度重なる災厄によって破損、消失したものが多く、古くからの良好なコンディションを保った人形はほとんど残っていないというのが現状です。例えば、琉球張子の現物のほとんどは戦災で灰と化していますし、東京の今戸人形は、震災・戦火などにより多くが消失しているのです。2011年の東日本大震災では、岩手県陸前高田市の市立博物館が津波で甚大な被害を受け、所蔵されていた貴重な高田人形のほとんどが失われたことは記憶に新しいところでしょう。郷土人形は、それぞれの土地の先人たちのあいだで長い年月にわたり受け継がれてきた文化やアイデンティティを見出すことができるドキュメントのようなものであり、今後もこの貴重な資料群を次代へしっかりと繋いでいかなければならないということをあらためて実感しました。

また、今回の展覧会をご覧になったお客様からは「素朴で愛しい人形の容姿から、元気をもらった」という感想を多くいただきました。私はこうした観客の素直な反応を、主催者のひとりとしてとても嬉しく感じたものです。全国の郷土人形を紹介する展覧会を開催しようと、所蔵者の元へ足を運んだのは、令和3年秋のこと。世の中はコロナ禍の真っ只中で、自由な行動が規制され、人々の表情はますます陰しさを増しているように見えた時期でした。こうした状況だからこそ、人間の本来の生命力や美しさを鮮やかに表現した郷土人形の姿や表情に眼差しを向けてほしい——そう思ったのがこの展覧会を企画したきっかけでした。「平穏無事に毎日が送れますように」と、かつて人々はその気持ち、その願いを日々心に確かめるために、願いを込めた人形を身近においたのです。そして前述した観客の反応が示するように、過去の日本に生きた庶民の心の支えとして求められた郷土人形は、時代を超えて現代に生きる人々の心を揺さぶり、私たちを笑顔にしてくれたのです。

さいごに、今回の展覧会や関連事業の開催を通じて、多くの方々と交流し、情報を交換することができました。日本人形文化研究所所長の林直輝氏、三河大浜土人形師の禰宜田徹氏、琉球張子作家の豊永守人氏、郷土玩具愛好会・日本雪だるまの会、睦沢町立歴史民俗資料館、小牧市久保一色土雛保存会等々…。こうした多様な繋がりを今後の民芸館の活動に活かしていきたいと思います。

（都筑正敏）



# 「柳宗悦と愛知の民芸」展 資料紹介

※引用文の字体は常用漢字体に、仮名遣いを現代仮名遣いに改め、ルビを追加して掲載しています。

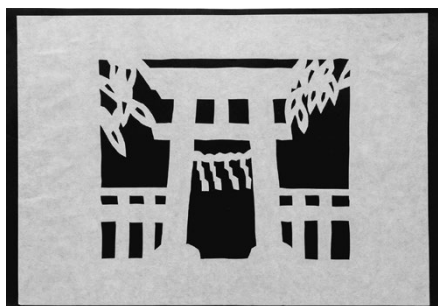
当館では9月24日(日)まで企画展「柳宗悦と愛知の民芸」を開催しています。本展では、民藝運動の創始者・柳宗悦(1889-1961)の著書『手仕事の日本』(昭和23年発行)に記載されている愛知県の手仕事を、館藏品より約200点紹介しています。今回は展示品より花祭の「ざぜち」について紹介します。

花祭は、神を迎えて悪霊を祓い、無病息災・五穀豊穰などを祈る祭で、昭和51年(1976)に国の重要無形民俗文化財に指定されました。毎年11月から3月上旬にかけて、東栄町11カ所・豊根村3カ所・設楽町1カ所の計15カ所で行われます。この神事が執り行われる場所を神聖な場として飾るのが、ざぜちを含む切り草(切り紙)です。ざぜちは白い半紙に絵型を切り抜いたもので、神事を行う部屋に張り渡す注連縄や鴨居に飾ります。絵柄や種類は地区によって異なります。

昭和12年1月2日、柳は本郷村(現・東栄町)中在家地区の花祭を見るため、陶芸家の河井寛次郎と濱田庄司、染織家の外村吉之介、柳の友人で官僚の水谷良一を伴い、民俗学会会員の仲間に加わって訪れました。これは柳がもともと実業家・民俗学者の渋沢敬三の私設博物館であるアチックミュージアムでざぜちを知り、このアチックミュージアム関係者の協力で叶ったことでした。この時は中在家の旧家・原田家の世話になり、その住宅に心惹かれたこと、花祭に関しては「ざぜち」に誘われたので、祭そのものにはそう期待がなかった。」という柳も「今迄見た祭事のうち、こんなにも活々したものが残っているのも少なく、特に踊りの型や其の迫る韻律には心を打たれた。」と思ひ返しています。また、柳は、扱いやすい道具ではなく小刀や鑿<sup>のみ</sup>で切り出されたざぜちの線や模様<sup>しる</sup>に美を見出し、「眼を楽ましめる為<sup>しる</sup>に模様を切り出すのではなくして、単に神事を現わす徴<sup>しる</sup>」であるざぜちを「邪気や街気が起る機縁がない世界で作られたものは必然に美しい。」と『工藝』84号(昭和13年発行)で述べています。



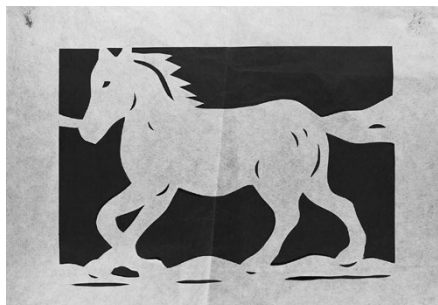
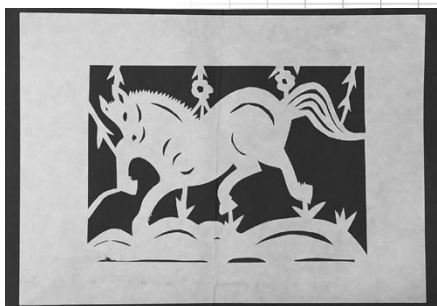
平成29年(2017) 布川地区の花祭



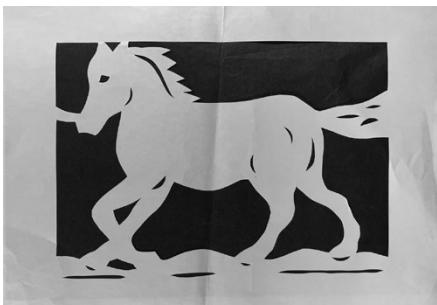
中在家地区のざぜち



布川地区のざぜち



下粟代地区のざぜち



中設楽地区のざぜち

以上が本展で展示している所蔵のざぜち6点です。平成28年に寄贈いただいた資料ですが、地区の詳細は不明であったため、本展では『古よりの花祭 受け継ぎし技と形』(東栄町・平成24年発行)を参考に名称をつけました。祭の終盤「湯ばやし」の舞ではあちこちに熱湯を振りまき、ざぜちなどの切り草もお湯を被るため、当館の資料は状態を鑑みるに実際に使用されたものではなく、花祭の普及のために制作されたものだと思います。

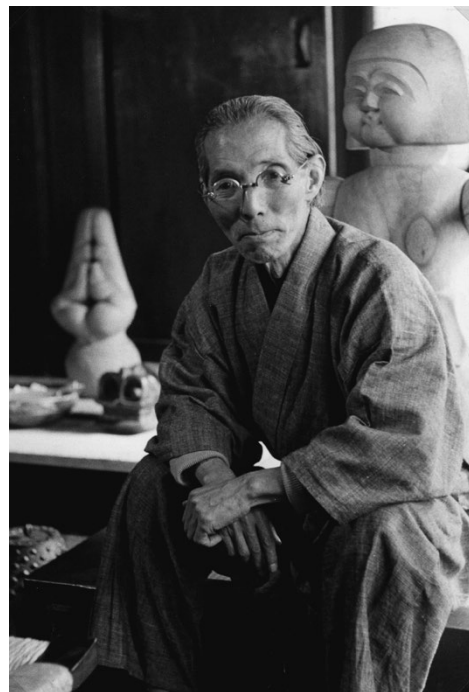
(岩間千秋)

# 「河井寛次郎展—寛次郎の魅力は何ですか」準備レポート

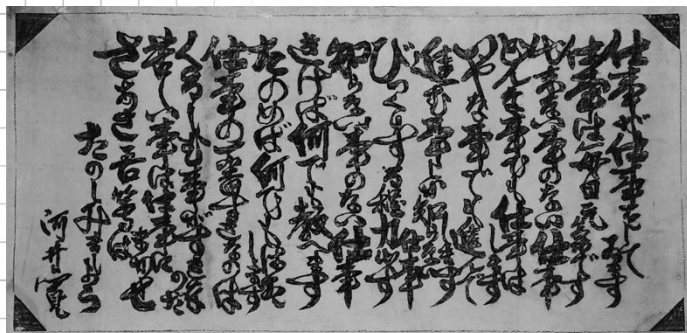
12月16日(土)～令和6年3月10日(日)の間、豊田市民芸館開館40周年記念・河井寛次郎記念館開館50周年記念「河井寛次郎展—寛次郎の魅力は何ですか」を開催します。

日本を代表する陶芸家・河井寛次郎(1890-1966)は、柳宗悦、濱田庄司とともに日用雑器の美へ関心を深め、「民藝」の新語を作り、民藝運動を推進しました。本展では当館開館40周年事業の一環として、開館50周年を迎える京都の河井寛次郎記念館の所蔵品より、陶芸家・河井寛次郎の創作活動の全貌を紹介します。

河井の作品は、東洋陶磁の技法を駆使した初期作品、民藝運動を牽引する中での実用を意識した中期作品、独創的な造形美へと変化した後期作品に大別されますが、その魅力は、作品の技巧性・独創性に加え、彼の人間性と彼が伝える言葉の力にあります。第1・第2民芸館のメイン会場では、河井寛次郎の陶業の仕事や、昭和・戦後期に作られた木彫像や木彫面、真鍮のキセル、河井の人間性・精神性を表現した書、河井の愛した蒐集品などを紹介し、関連企画として第3民芸館で「中村裕太が手さぐる河井寛次郎」展を開催し、「さわる」「きく」などの感覚から河井寛次郎の作品作りにアプローチします。



河井寛次郎 昭和36年(71歳)



拓本「仕事」 昭和25年頃



三色打薬扁壺 昭和36年頃



木彫像 昭和29年頃

河井の言葉には、作品と見る側の意志を結びつける効果があります。私は拓本「仕事」を目にする度に、河井の「仕事」を体現した作品を見て、作品を通して河井寛次郎から「あなたはどうか」と自身について考える機会を毎回与えられます。本展の第1民芸館では、河井の言葉と「仕事」を一堂に展覧します。来館の方にも「河井寛次郎」を感じていただける場となれば幸いです。

(岩間千秋)

## ■ 関連企画のご案内 ■

小間絵シールやポストカードなど、河井寛次郎記念館の委託販売もあります。

### ・記念講演会「祖父・河井寛次郎」

日時：令和6年1月20日(土)  
14時～15時30分  
講師：鷺珠江氏  
(河井寛次郎記念館学芸員)  
会場：第3民芸館  
聴講：無料  
ただし会期中の観覧券の提示必要  
定員：先着50名  
(事前申込み不要)

### ・「河井寛次郎の器でお茶を楽しむ」

日時：令和6年1月21日(日)  
①10時～11時30分  
②13時30分～15時  
講師：鷺珠江氏  
(河井寛次郎記念館学芸員)  
会場：茶室 勸桜亭  
参加費：2,500円  
定員：各回抽選10名(事前申込み制・  
詳細はホームページか展覧会チラシ参照)  
※当日は勸桜亭の通常営業は行いません

### ・ギャラリートーク(展示解説)

日時：令和6年2月17日(土)  
14時～1時間程度  
会場：第1民芸館集合  
聴講：無料  
ただし当日の  
観覧券の提示必要  
定員：先着20名程度  
(事前申込み不要)

## ○市民文化講座 青佳談義（第11回）

令和5年2月25日（土） 参加者：24人

「民芸」や「本多静雄氏」について知りたい方、学びたい方を対象とした講座「青佳談義」を開催しました。

第11回目今回は、元愛知県陶磁美術館の副館長であった仲野泰裕氏からお話をうかがいました。本多氏との出会い、猿投窯発見までのいきさつや渥美窯の調査研究について、さらには愛知県陶磁資料館設立から名称変更までの経緯、本多イズムに関することまで、本多氏の業績のみならず、文献だけでは知り得ない、陶磁にかけるその思いについて語っていただきました。陶芸文化の普及を図るとともに、愛知県陶磁資料館の建設に至るまで、全力で尽力した本多静雄氏の足取りをあらためて知る機会となりました。



## ○初夏、森の手ざわり

令和5年5月21日（日） 参加者：約500人

今年も「矢作川流域の交流の場、そして地域への広がり」をテーマに、NPO法人民芸の森倶楽部と共働で開催しました。

舞台での演奏や展示、出店などを行い、地域住民の交流や憩いの場となりました。



狂言舞台の賑わい

## ○森のアート展 Vol.18 「山口百子 白南風～白露」

令和5年7月15日（土）～9月18日（月・祝）

18回目の森のアート展となる本展は、初めて公募で作家を募集しました。選ばれたのは愛知県在住の美術家・山口百子氏（1965年－）。彼女は、日本画などを制作しながら、美術館や学校で魅力的なワークショップを多数企画しています。今回の展示では、絹本による衝立や掛け軸、生地を用いて空間全体を構成する作品などを、民芸の森の古民家や茶室、屋外に設置しています。伝統的な日本画の技法を取り入れながらも、見る角度や光や風の変化によって作品の見方が変わる独自の世界を展開しました。



「いきをする」（旧海老名三平宅での展示）

## ○森のアート展 Vol.19 「山田和俊 寄贈記念展」

令和5年10月7日（土）～12月17日（日）

豊田市在住の陶芸家・山田和俊氏（1933年－）の陶芸作品を紹介します。山田氏は、1973年自宅敷地内に「さなげ窯」を建設。猿投山麓の良質の粘土を使用して、この土地独特の焼味をもった焼物を手がけてきました。1976年に豊田工芸協会を設立。以来、数多くの展覧会を開催するとともに工芸の発展と文化振興に力を注いできました。本展は山田氏が令和4年度に15点の作品を豊田市民芸館に寄贈されたことを記念して開催いたします。



灰釉大平鉢 1996年

### 記念講演会「山田和俊さんの陶芸の道（仮）」

日時：10月7日（土）14時00分～（40分程度） 講師：八木哲也氏（豊田工芸協会顧問、衆議院議員）  
場所：豊田市民芸の森・田舎家 定員：15名程度

# 事業報告 (令和4年度)

## 民芸館年間入館者数

46,338人 (310日開館)  
(3年度 25,345人/311日開館 \*令和4年度から3館すべての入場者を合算する積算方法に変更)

## 特別展・企画展

特別展2回、企画展2回開催しました。  
各展覧会では、ギャラリートーク、体験、講演会などを開催しました。

### ◎企画展

「新収蔵品展」(第2民芸館)  
会期 2月8日～5月29日  
入館者 3,992人  
関連企画 ギャラリートーク、  
絞り染め体験



同時開催「館蔵 手仕事の優品展」  
(第1民芸館)  
会期 2月8日～5月29日  
入館者 3,437人

### ◎企画展

「雑誌『工藝』の美」(第2民芸館)  
会期 6月7日～8月28日  
入館者 2,639人 (73日間)  
関連企画 ギャラリートーク  
同時開催「本多静雄コレクション展」  
(第1民芸館)  
会期 6月7日～8月28日  
入館者 2,614人



### ◎特別展 \*日本民藝館からの巡回展

「藍染の絞り 片野元彦・かほりの仕事」  
(第1・2民芸館)  
会期 9月13日～12月4日  
入館者 2,818人 (74日間)  
関連企画 講演会、藍染め絞り体験、  
ギャラリートーク、  
関連グッズ販売



### ◎特別展

「全国の郷土人形  
—祈り・願い・美しさのかたち」  
(第1・2民芸館)  
会期 1月21日～5月7日  
入館者 3,359人  
関連企画 講演会、絵付け体験、  
絵付け実演、  
関連グッズ販売



## 民芸館講座開催

定例の講座と団体利用による出張講座を行いました。

### 【講座参加者数】

[連続講座]  
穴窯陶芸教室 参加者数 201人  
ガス窯陶芸教室 参加者数 436人  
染織教室 参加者数 312人  
絞り染め教室 参加者数 345人  
拳母木綿教室 参加者数 561人  
トンボ玉教室 参加者数 356人

[体験(親子・成人) 384人]

ガス窯7回 穴窯陶芸2回 トンボ玉2回  
絞り染め2回 裂織2回

### 【団体 利用件数・参加者数】

穴窯陶芸1件、ガス窯陶芸2件 絞り染め4件  
呈茶2件 見学2件 合計342人

### 【民芸体験・参加者数】

穴窯陶芸、狛犬づくり、ハンカチ染体験、しめ縄作り  
計9回・125人

## 刊行物

「民芸館だより」第33号・第34号

## 資料収集

打掛一斗五升甕、口紅大鉢、胡桃手提げ籠、山ぶどう  
手提げ籠購入。和紙、綿地、型絵紙染、書簡、鉢、壺、  
茶碗などの寄贈。令和4年3月末で収蔵資料数は  
12,205件 55,560点となりました。

## 資料・写真貸出

資料貸出1件/民芸の森「観月会」俳句展示(NPO法人  
民芸の森倶楽部)へ「句集 流轉 本多美恵」計1点

## 友の会

令和4年12月31日をもって閉会  
会員数 54人(閉会時点)  
友の会通信発行3回(116～118号)  
閉会に伴う記念品進呈事業及び情報郵送サービス(有料)  
の開始

## 民芸の森

年間入館者数 21,708人  
イベント 初夏、森のてざわり5/15、観月会10/8、  
勘八峡紅葉ウォーキング11/20  
体験ワークショップ「貼り絵でミニ鯉のぼりを作ろう」  
ほか8回  
森のアート展「野田宗憲 陶芸作品展」ほか1回

# 民芸館からのお知らせ

## ① さなげ古窯本多記念館の機能を民芸の森へ統合

豊田市民芸館内・さなげ古窯本多記念館（陶芸資料館）の展示機能を、民芸の森田舎家へ統合します。令和6年度からは、猿投窯・渥美窯の発見者である本多静雄の業績や、多岐にわたる蒐集品を一堂に紹介する場へとリニューアルします。



現在の田舎家での展示

## ② 茶室・勘桜亭、呈茶料金改定のお知らせ

令和5年度より、茶室・勘桜亭の呈茶料金を450円（菓子付）へと改定しました。皆様にはご理解の程よろしくお願いいたします。

## ③ 民芸館施設整備の報告

5月～6月の間、第1・第2民芸館を休館し、館内の壁紙やカーペット、展示ケースのクロスの修繕を行いました。展示ケースのクロスには葛布生産で有名な静岡県島田市の葛布を用い、葛の光沢ある繊維によって資料がより美しく展示できるようになりました。展示台に葛布を使用するのは、民藝運動の創始者・柳宗悦もおおいにこだわった部分で、東京都・駒場の日本民藝館では展示ケースはもちろん、壁紙にも使用しています。



葛布を貼った展示ケース

また、このほか民芸館敷地内の案内看板等の整備を今後も行っていきます。

## ④ 紅葉ウィーク開催のお知らせ

11月11日（土）～11月26日（日）の民芸館と紅葉を楽しむ紅葉ウィークで、様々なイベントを開催します。

### ◆茶室 勘桜亭の平日営業（月曜日は休業、通常営業は土日祝日）

時間：午前10時～午後4時 料金：一服450円（菓子付）

### ◆民芸館・民芸の森・いこいの広場 3館スタンプラリー

すべてのスタンプを集めたら、民芸館ポストカード、または、民芸の森クリアファイルをプレゼント

スタンプ設置場所：民芸館（第3民芸館）・民芸の森（田舎家）・平戸橋いこいの広場（受付）

時間：午前9時～午後4時30分 入館料：無料

### ◆勘八峡紅葉ウォーキング2023

民芸の森を発着点とし、民芸館・前田公園・勘八水管橋・越戸ダムなど紅葉の名所である勘八峡全長約4kmを巡ります。

日時：11月18日（土）午前10時～午後1時（最終受付は午前11時）小雨決行

事前申込：不要 集合：民芸の森 参加：無料



過去の勘八峡紅葉ウォーキングの様子

## お問い合わせ 豊田市民芸館

〒470-0331 愛知県豊田市平戸橋町波岩86-100

TEL 0565-45-4039 FAX 0565-46-2588

休館日 月曜日（祝日の場合は開館）

開館時間 午前9時～午後5時

入館料 無料（特別展は有料）

<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/>

## 豊田市民芸の森

〒470-0331

豊田市平戸橋町石平60-1

TEL 0565-46-0001

